

海外研修報告書

東京都立墨東病院 小林 剛

1. 参加した目的とその成果

米国 Stanford 大学の放射線診療を間近に見てみたいということが、正直な目的でした。その中で、3D イメージング、高磁場 MRI、分子イメージングなど、放射線画像診断のトレンドと成り得るモダリティについて学び、今後の業務および研究に生かしていければと思っていました。

また、個人的なことから機会があれば、専門としている乳がん診療について、米国の現状をのぞいてみたいという希望がありました。

実際に参加してみて、スケールの大きさ、施設の充実度に圧倒されました。臨床機関として、放射線科だけでセンターを持っているということは、医療の中で放射線診療の重要性が認知されているのだと思います。ひとつ残念だったことは、病院やがんセンターなどの現場での見学・実習が少なかったことです。大学での研修が目的とわかっているにもかかわらず、やはり病院で臨床に携わる身としては、もう少し、現場での仕事内容や臨床画像に触れてみたかったというのが、正直な気持ちです。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどの様に感じたか

モダリティ別に仕事が分業されているということは話に聞いていましたが、あれほど完全に分業されているとは思っていませんでした。

画像処理は、撮影現場とは別の場所にある 3D ラボで専門的に行われていましたが、まるでオフィスにいるようで、普段データの抽出と画像処理を同じ場所で行っている立場からすると不思議な感もありました。臨床画像は数多く見ることはできませんでしたが、画質に関してはあまりよい印象は持てませんでした。画質にこだわらなくとも診断がついてしまうからなのか、元データに原因があるのかはわかりませんが、データを撮った技師が解析まで行うことに慣れているので、疑問に思う部分も残りました。

研修の後半に Stanford 大学の施設で仕事をしている放射線技師の方たちとの交流会がありましたが、会話の中で自分の専門の話をする時、男性で Mammography を撮影している技師を初めてみた（和やかな雰囲気のままでしたが）いわれました。日本でも性差医療は進みつつありますが、「やはり米国は違うな」と感じました。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

今回の研修を終え、日本の放射線技師制度のよい面を活かしていきたいと思います。確かに専門性を高めることは質のよい検査（診断）につながると思います。しかし、放射線業務（画像診断）に関する広い知識を持った上での専門分野だと思っています。そういった意味で日本の放射線技師は総合的にスキルが高いと思います。

大学での研修と並んで、今回参加した 20 名の仲間から大きな影響を受けました。研究に取り組む姿勢や業務に対する思い、人間性、素晴らしい方々と知り合い人脈をつくれたことは、ぼくにとって大きな財産となりました。今後、モダリティにとらわれない「乳がん」という病気の画像診断・放射線診療の専門技師を目指しつつ、今回の研修で得たことを最大限に生かして研究を進め、普及していきたいと考えています。

おわりに、今回の海外研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会ならびに墨東病院診療放射線科のみなさまに感謝いたします。



写真: Breast Cancer Center の IKEDA M.D.と